



Title	刊行に寄せて
Author(s)	水谷, 純也
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 1
Issue Date	1994-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35251
Type	bulletin (article)
File Information	1_kankou.pdf



[Instructions for use](#)

刊行に寄せて

技術部長 水谷 純也（農学部長）

北海道大学農学部技術部が技術・研究報告第1号を発行することになった。農学部に技術部が設置されたのは、平成3年4月1日で「北海道大学農学部技術職員組織内規」の実施によるものである。

最近の技術の進歩は目覚ましいものがある。私が専門としている生態化学・農薬化学・天然物化学の分野でも質量分析計、核磁気共鳴装置など機器を中心とした分析技術のお蔭で、これまで検出できなかった微量生理活性物質を分析できるようになり、謎とされてきた生物間相互作用の場において重要な役割を果たしているいわゆる二次代謝産物の研究が遂行できるようになったのである。これほど素晴らしい分析装置も、保守管理が大変で、高度な専門知識を有する技術職員の協力なしには1日たりといえども維持して行けないのである。測定法についても日進月歩で、昨日まで分析できなかったものが新しい手法の開発によって、たとえば新しいソフトを用いることによって化合物の構造解析が可能になったりする。したがって、技術職員も常に新しい知識・技術の修得につとめなければならない。分析機器メーカーなどが開催する講習会やユーザズミーティングに出席して、新しい技術を身につける必要がある。

農学部技術職員の組織化が実現した経緯について少し述べておきたい。国大協は昭和52年「研究技術専門官制度問題小委員会」を設置し、処遇、高度技術者の確保、在籍者の意欲向上・活性化等の問題点について検討をはじめた。昭和60年文部省も「技術職員待遇改善検討会」を設置してこの問題と真剣に取り組んだ。その後紆余曲折はあったが、昭和63年国大協は各大学の意見を取りまとめ、その結果を報告するとともに、組織化のモデル案を示し組織化を促し、さらに研修、資格認定制度の今後の進め方について提言した。当時の北大伴学長は昭和63年11月部局長懇談会で各部局長に対し組織化に向けての検討を要請した。しかし、その後も各部局では諸般の事情により組織化が進まず、結局平成3年2月26日の学長裁定による「北海道大学教室系技術職員の組織化等に関する要項」が定められ、同年4月1日から実施された。

このように10数年かかってやっとスタートした農学部技術部であるが、その後の技術部の活動には目を瞠るものがある。平成4年9月29日～30日には第1回の職員研修を農学部および附属牧場で、平成5年10月25日～28日には第2回の研修を農学部、附属植物園、および理学部附属極低温液化センターで実施し、他部局からの参加者も含め40名以上の職員が熱心に研修を受け、最新の知識の修得、資質の向上に大いに役だったことと評価している。さらに今回、「北海道大学農学部技術部技術・研究報告集」第1号を発行する運びに至ったことは関係各位の尽力によるものと、その努力を多としたい。

私の専門を通して、技術職員が研究教育支援体制として重要な役割を果たしていることの一端について述べたが、このことは農学部のすべての研究分野に当てはまることと思う。理化学研究所が創設の初期から技術者の育成に力を入れ、理研の世界的な研究水準を支えた工作陣ということがよく知られているが、わが技術部も組織化を達成し、研修等の充実による技術集団の育成を図ることによって研究教育支援体制としての機能がさらに発揮されるものと大いに期待している。

平成6年3月